

Market Flash

発表日：2020年5月8日(金)

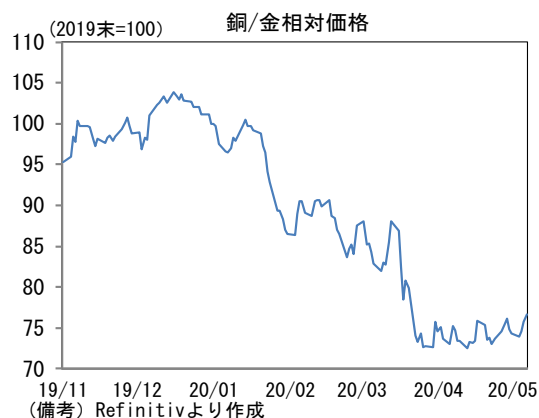
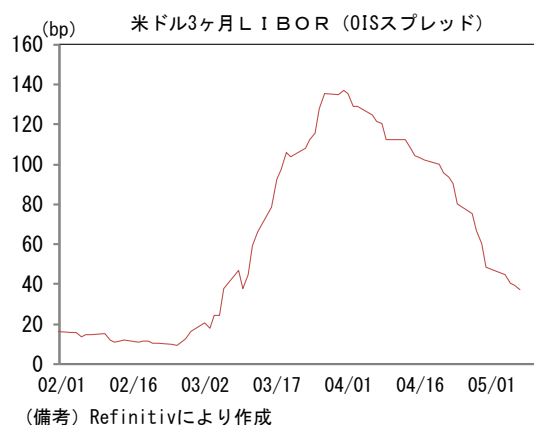
それでも伸びるIT関連財 銅/金相対価格の底打ち感

第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査
主任エコノミスト 藤代 宏一 (TEL:03-5221-4523)

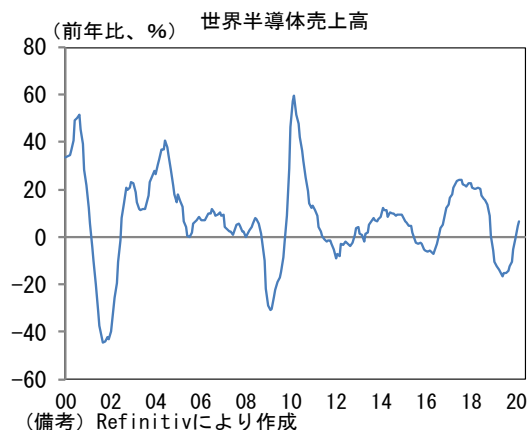
- ・日経平均の20,000円超定着には、6ヶ月程度の時間を要するだろう。
- ・USD/JPYは、先行き12ヶ月105程度で推移しよう。
- ・日銀は現在のYCCを長期にわたって維持するだろう。
- ・FEDはゼロ金利政策下で資産購入を継続するだろう。

< # I T 関連財 # LIBOR 正常化 # 銅/金相対価格 >

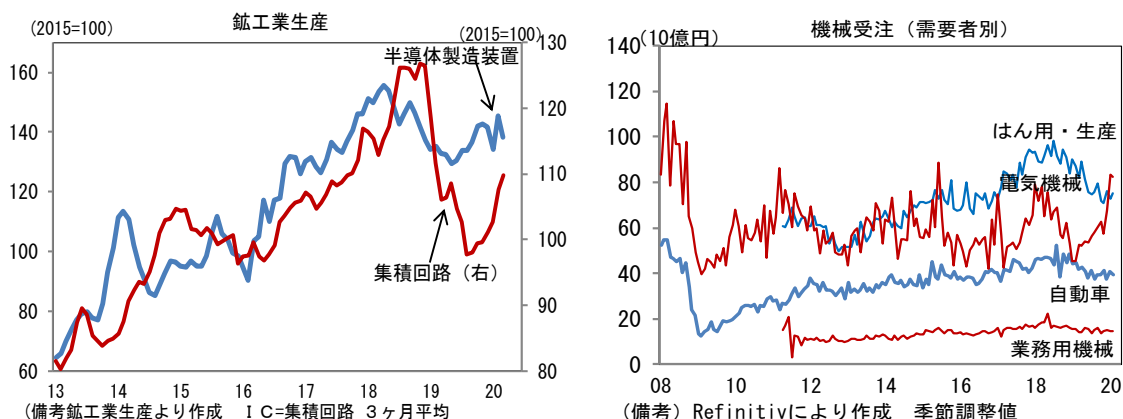
- ・前日の米国株は上昇。NYダウは+0.9%、NASDAQは+1.4%で引け。NASDAQは年初来のパフォーマンスがプラスに。8日発表予定の4月雇用統計は2000万人規模の雇用減が予想されている反面、経済活動再開に対する期待が優勢。VIXは31.4へと低下し30割れに迫った。クレジット市場はIG（投資適格）、HY（投機的格付け）が共に堅調。
- ・米金利カーブはブル・フラット。10年は0.641%（▲6.2bp）、30年は1.329%（▲6.5bp）で引け。短期金融市場ではドルLIBOR（OISスプレッド）が一段と低下し、ドル流動性の回復を確認。短期金融市場は概ね正常化しつつある。USD/JPYは一時106半ばへと上昇したものの、すぐに元の水準に戻し106前半で引け。EUR/USDは108前半で一進一退。商品はまちまち。WTI原油が23.55ドル（▲0.44ドル）へと小幅下落した反面、銅は5274.0ドル（+76.0ドル）へと上昇。金も1725.8ドル（+37.3ドル）へと上昇した。安全資産の「金」と、景気の強さを反映する「銅」の相対価格は明確に下げ止まっている。



- 世界半導体売上高をみる限り、5Gの本格稼働を見据えた需要は底堅いようだ。コロナ禍によって多くの産業が大打撃を受ける中においても、IT関連財は19年夏頃をボトムとする回復を続けている。3月の世界半導体売上高は前月比+0.9%と堅調を維持し、前年比上昇率もプラス幅が拡大した。



- こうしたデータは日本のマクロデータと整合的。鉱工業生産では集積回路（IC）、半導体製造装置、コンデンサ等が増産傾向にあり、そして喜ばしいことに電子部品・デバイス工業の在庫が積み上がっている様子もない。機械受注統計に目を向けると、機首別では電子計算機等（半導体製造装置が含まれる）が伸び、それに符合する形で需要者別では電気機械の旺盛な需要が示されている。



- この先、コロナ禍が段階的に終息していくことを前提とした場合、雇用・所得環境の悪化から民生用デバイス市場は一定の下押し圧力を受けると予想される。他方、本来は旅行、レジャーに向かうはずだったおカネが高性能スマホ、タブレット、PCに振り分けられる可能性は相応に高いだろう。移動を伴う経済活動が制限される下、5Gの本格稼働と相まって動画等の大容量通信の需要が増加すれば、4G機器からの買い替えが急速に進む可能性があるだろう。
- 日本株はコロナ禍以前から半導体一本足打法とも言える状況にあったが、こうした傾向は今後も変化がなさそうだ。

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所調査研究本部経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。